上映映画解説

1955, 2 ~ 3

国立近代美術館　フィルムライブラリー

No. 32

Faust

『ファウスト』鑑賞会について

フィルム・ライブラリーの特別鑑賞会では、毎週一回水曜日に、歴史的な価値のある芸術性豊かな古典映画を上映し、現在までに日本をはじめ、ドイツ・フランス・イタリア・ソヴェトの作品をとり上げてきましたが、今回はその第一三回としてドイツのサイレント「ファウスト」を鑑賞することとし、今回から一般の要望により毎週日曜日にも（毎週日・水曜日二時）上映することにいたしました。

「ファウスト」は、ドイツのウーファ社一九二六（大正一五）年度の作品で、我が国では一九二八（昭和三）年三月一日に、武蔵野館と帝国館で封切（田口商店輸入）されましたが、監督ムルナウと主演ヤニングスの組合せは大いに人気を集めました。

ファウスト　一〇巻

一九二六年独逸ウーファ社作品

脚色……ハンス・キーザー氏
監督……フレッド・ヴェー・ムルナウ氏
撮影……カール・ホフマン氏
装置衣裳……ロバート・ハールト氏
……ワルター・レーリッヒ氏

――キャスト――

ファウスト……ゲスタ・エクマン氏
メフィスト……エミール・ヤニングス氏
グレートヒェン……カミラ・ホルン嬢
母親……フリーダ・リヒャルト夫人
ヴァレンティン……ヴィルヘルム・ディーテルレ氏
マルテ……イヴェット・ギルベール夫人
パルマ公爵夫人……ハンナ・ラルフ嬢
天使……ヴェルナー・フュッテラー氏

Faust

Mephisto ..... Emil Jannings
Faust ..... Gösta Ekmann
Gretchen ..... Camilla Horn
Scenario by Hans Kyser,
Directed by F. W. Murnau,
Photographed by Carl Hoffmann.

「ファウスト」といえば、誰しもドイツの文豪ゲーテの世界的な名作「ファウスト」を考えることでしょう。この映画は中世ドイツの伝説「ファウスト博士」を基として、ゲーテをはじめ多くの異本を参考にしながら脚色したと伝えられますが、念のため当時のキネマ旬報第二八八（一九二八年三月一日）号から梗概を紹介してみましょう。

略筋――天使は悪魔と賭けをしたのであった。若し汝地上に降りてあのファウストの魂を汚しその「善」を悉く滅したらんには、地上は汝が所有する所たらん、と。そして悪魔は地上へと降りて行った。悪魔はファウストの住む町にその妖術と呪とを以て疫病を蔓らせた。人々は次から次にと疫病の為めに死んで行った。偉大なる化学者、医学者たるファウスト博士の力を以てしても、その疫病の伝播を止める術は、死に行く人を此世に繋き留める術は求め得なかった。彼は絶望の余り、神を呪ひ天を呪ひ、そして魔の力に心ひかれ始めた。その時、メフィストは姿を現はし、彼の不滅の霊魂に対し、地上の凡ての力を与ふる取引を以て彼を誘惑した。ファウストはそれによって死者を蘇生せしむる事が出来たが、聖なるものを失ッた彼は十字架に恐れを抱いた。人々は彼に石を投じた。此の世に生き永らへる事に憎悪を感じたファウストは毒杯を仰がうとする。時に再びメフィストは姿を現はし、青春時代の幻を以て彼を誘惑した。悪魔の誘惑に負けた彼はその云ふが尽になった。青春の貴公子ファウストはメフィストの助けを得て地上の凡ゆる歓楽を味った。が、彼の心に未だ善は残ってゐた。彼は故郷へ帰りたくなった。故郷で彼は清き処女グレーチヘンを知った。メフィストの助けによってファウストは彼女を己が物とした。が、その為めに彼女の母と兄とは死んだ。そして彼女は人々から罵られ恥しめられたその上彼女は生れた子を雪の夜に死に至らしめた事から赤坊殺しとして焚刑に処せられ様とした。その刹那に悔ひ改めたファウストは昔の白髪の老人の姿で馳けつけた。炎の中で二人が抱き合った時、再びファウストに輝かしい青春が帰って来た。愛の勝利であった。二人の霊体は天国の門をくぐったのである。

当時の反響の一端としてキネマ旬報第二八九（一九二八年三月一一日）号所載の木村千疋男氏の批評の一部を引用してみますと――

（前略）監督ムルナウの見事な描写力、背景建築、演技キャメラワーク、照明等総て水準を抜いた水際だった映画技巧は、その技巧の質量感や暢達さに於いて私を感心させた。がこれは必ずしもキーザーを難ずる訳ではないが、天上界と人間界との融和が成功してゐないこと――其結果描写的な意味でなく構成的な意味で屢々その効果に混乱を生じてゐる。（中略）

ヤニングスのメフィストはファウストが若さを得る迄のプロログに於いて見事である。エクマンやホルンは演技として取立てて言ふべきほどのものがないが、その美しさ可憐さなどは甚だ好感を与へる。記しておき度いのは字幕文の美しさで、欧州物には珍らしい立派な文章と思へた。

（引用文の仮名づかいはすべて原文のまま）

ファウストとその周囲

「ファウスト」は、ドイツウーファの一九二六年の作品である。この一九二六年という年は、ドイツ映画にとって、一口にいえば、第一期黄金時代の終焉を意味する年であった。第一次大戦後、敗戦の困窮の中から「カリガリ博士」（一九一九）の表現主義に始まるドイツ映画の目ざましい興隆は、相次ぐ表現主義映画とエルンスト・ルビッチュの一連の王朝物を経て、一九二四年になると、フリッツ・ラングの「ジークフリート」や「クリームヒルトの復讐」のような壮大な作品を生み、二五年にはF・W・ムルナウの無字幕映画の傑作「最後の人」や、大胆な愛欲描写に評判となったE・A・デュポンの「ヴァリエテ」、G・W・パブストがその鋭利な社会感覚で早くも注目を俗びた「喜びなき街」などが現れて、ドイツ映画はその最盛期を築き上げ

た。ところが、二六年になると、アメリカの積極的なドルの招きに応じて、ムルナウも、デュポンも、そしてまた、それまでドイツ映画の傑作と言われるものの大部分をプロデュースして来たウーファの製作責任者エリッヒ・ポマーまでも、揃ってハリウッドの人となった。ルビッチュやスターのポーラ・ネグリは既にその前に渡米していた。俳優ではエミール・ヤニングスとコンラート・ファイトが共に翌二七年大西洋を渡った。こうしてドイツ映画界は一九二六年を境に俄かに淋しいものとなったのである。もっとも、この大異変でさえ、トーキーへの変革をはさんでそれから七年後の一九三三年、ヒットラーの率いるナチ政権によるユダヤ系や外国籍映画人の一斉追放という大嵐に較べれば、その受けた傷の広さと深さにおいて、ものの数ではなかったが……。

この「ファウスト」は、こんなわけで、監督のムルナウにしても、主演のヤニングスにしても、「最後の人」の大成功のあとをうけて、渡米寸前の作品であり、この年、この二人はもう一つモリエール原作の「タルテュフ」を発表して、大西洋上の〝片道船客〟となったのである。

ムルナウは、一九一九年映画界に入って以来、表現主義の影響を強く受け、「ジキル博士とハイド氏」(二一)、「ノスフェラトゥ」(二二、我が国未輸入)、「ファントム」(二三)など表現派的な怪奇趣味の作品を発表したが、次第にそうした傾向から脱して、遂に、老いさらばえた老ポーターの悲哀を練達した技巧で描く無字幕映画の金字塔「最後の人」に到達した。この「ファウスト」は、それに続く「タルテュフ」と共に再び誇張された様式的な表現に逆戻りした作品として、「最後の人」の絶讃の後だけにあまり評判はよくなかったが、ドイツ人にとっての「ファウスト」というものは、我々日本人にとっての「勧進帳」や「忠臣蔵」のように、いわば国民的道義の根底にまで強い影響を与えている古典であるから、その気負った様式的な運びになじめないからと言って、軽々に批判し去れるものではない。ただここではっきり言えることは、その気負い方がいかにもドイツ的な神祕性を帯びた、野心満々の第一級の気負い方だということである。渡米してからのムルナウは、第一作「サンライズ」(二七)が視覚的表現の極致として絶讃されただけで、その後は「四人の悪魔」(二八)「ストリート・ガール」(二九)とさっぱり振わず、トーキーへの移り変りと共に、ロバート・フラハティと結んで実写映画「タブウ」(三一)に活路を求めたが、その完成寸前の一九三一年三月一一日、自動車事故でこの世を去った。

ヤニングスは、一九一五年、ルビッチュのすすめで舞台から映画界入りして以来、「パッション」(一九)、「デセプション」(二〇)、「ファラオの恋」(二二)、「ピーター大帝」(二二)、「裏街の怪老窟」(二四)、「最後の人」(二五)など多数の映画に主演し、名実共にドイツ映画界を背負う大スターとなり、「肉体の道」(二八)「最後の命令」(二八)の二作でアカデミー賞を獲得したが、トーキーの訪れと共に、二九年には早くも帰独して「嘆きの天使」(三〇)、「黒鯨亭」(三四)などに健在を誇ったしかし、ナチの時代となってからは「プロシャの旗風」(三四)のような露骨な宣伝映画に協力、「毀れた瓶」(三七)「ロベルト・コッホ」(三九)の名演は我が国には公開されなかったが、「支配者」(三六)、「世界に告ぐ」(四一)と、いよいよ露骨な宣伝映画に主演したばかりか、同時に自らプロデューサーとして采配を振ったため、第二次大戦の敗戦と共に追放され、その後帰り咲くことなく一九五〇年一月二日オーストリイの隠居先で病死した。

カミラ・ホルンは、ムルナウに見出されてこの「ファウスト」で一躍大役を与えられたという幸運のスター、一度ハリウッドに行ってからまたドイツに戻り、ジャック・フェーデがドイツで作った「旅する人々」(三八)に出ていたが、近況はゲスタ・エックマンと共に詳かでない。この映画で端正な男ぶりを見せるヴィルヘルム・ディターレは、今ハリウッドで監督として活躍しているウィリアム・ディターレの三十年近く前の姿にほかならない。

(フィルム・ライブラリー運営委員——清水　晶)